

中国広東省汕頭および潮州における位牌調査

神奈川大学日本常民文化研究所 小熊 誠

位牌は、祖先祭祀の民俗文化と関連して儒教文化圏ともいえる東アジア特有の物質文化とすることができる。位牌は、祖先あるいは死者の霊魂を表徴するもので、中国においては古代からその存在を認めることができる。しかし、東アジアの他地域においては、儒教あるいは仏教の受容と民間への普及などに関わって、その導入時期、形態、祭祀方法がそれぞれ異なっている。

位牌そのものの形態には、いくつかの表象が含まれている。例えば、中国の位牌は天が丸く、地が四角く作られており、「天円地方」という宇宙観が示されている。また、位牌の色や文字の色、模様など、それぞれの表徴的意味を確認することで、それぞれの地域における位牌の象徴的意味付けを考察する。さらに、位牌の祭祀方法と祭祀集団を調査することによって、各地域の祖先祭祀集団の在り方の違いを比較することができる。

2010年3月1日から5日にかけて、中国広東省汕頭および潮州において位牌調査を実施した。

まず、汕頭市内において位牌作成の木工店を訪問した。ここでは、一般の位牌と寺院に奉納する位牌の2種類の位牌の計測を行ない、それぞれ購入した。その構造は、台と上部に分解でき、さらに上部が表と裏に分解できる。その間に、死者の生年月日、死亡年月日、墓の方角（分金）や場所などの情報を書くようになっている。

次に、潮安県鮑浦玉井村の林姓祠堂の位牌を調査した。宗族における房レベルの祖先を祀る一つの「祖屋」において十三世祖から十五世祖の位牌を調査した。この位牌が、この地域で古いものとされ、清朝乾隆年間の位牌とされている。十三世祖のものは、一枚板に数组の夫婦の名前が書かれており、一枚に一夫婦を基本とする現在の位牌とは形式が異なる。

この村の林姓宗族最上層の林氏宗祠（敬愛堂）には、位牌は祀られていなかった。宗族の分枝の一つである祠堂（永思堂）には、五世祖から十二世祖までの位牌が祀られていたが、いずれも最近作られたものであった。もう一つの林氏宗祠の孝思堂には、分節ごとに長房、二房、三房、四房、五房の位牌が昭穆に並べられ、それぞれ「二世至十三世」の「祖列」の位牌となっていた。いずれも新しく作成された位牌である。祠堂は古いものであるが、文革期に位牌は処分され、近年新たに作り直されたと考えられる。

潮州では、安濟聖王廟（青龍古廟）と開元寺を見学した。開元寺において歴代和尚の位牌を見学したが、いずれも新しいもので、その形式は一般のものと変わらない形式であった。

位牌の形式として、夫婦単位の本立の位牌が現在使用されているのに対し、以前は、一枚に複数の祖先が記されているものがあり、客家式の一枚位牌との関連が示唆される。